

教育の眼 四題 守屋 義雄

NPO児童生徒教育支援協会 松本市

故郷

平成十四年十月二十九日(火)

不巧の名作「夜明け前」の著者、島崎藤村が故郷の神坂小学校に初めて迎えられて講演した時、近郷から集まった人々でいっぱいになった講堂の壇上で、藤村はしばらく無言でいた。そうしてようやく口にした言葉は、

血につながるふるさと

心につながるふるさと

言葉につながるふるさと

と、たつた三行の言葉だったという。啞然として水を打ったように静かにしている聴衆の前に、「私は春と云う言葉の意味が判るようになるまで十年間を費やしました」と、それだけ言って降壇したそう

このほど北朝鮮に拉致されて二十四年ぶりに故郷に帰った曾我ひとみさんが、テレビの画面で不自由になつた日本語を絞り出すように「人々の心、水、谷、みんな温かく、美しくみえます」と語るのを聞いたとき、私は涙が溢れて止まらなかつた。「ふるさととは遠きにあると思ふもの、そして悲しくつたふもの」と、室生犀星の詩は語るけれど、無理やり連れ去る拉致という不条理な仕打ちに遇つて、異国の地での二十四年は余りに過酷である。額にしわを刻んだ父の肩に頬を寄せて、もう一方の肩に手を回してはにかみを懸命に押さえ替える姿に、歳月を越えた父と娘の血の濃さと絆の強さを知つた。

故郷喪失が言われるようになって久しい。思い出のみで生きていくことは空しい。しかし、家族や生活を共にした人たちと生きた証、そういう心の中で大切にしているものをなくすことは切ない。帰国した五人が帰京で人々と会い、旧友と語らい、友達と再会しそこで歌う唱歌や校歌、共にやったスポーツで心が癒され、異国の地で閉ざされた心が故郷で少しずつ開かれていくのが五人の表情

め何のことかわからなかつたが、しばらくすると誰からともなくすすり泣く声

起つたと伝えられている。

からよくわかる。

五人の故郷への帰還は、経済至上主義に溺れ、国際化が進み、虚飾と虚栄の政治に翻弄されて歩むべき道を見失っている日本に、もう一度、祖国には何が大切か、を涙と共にしみじみ考えさせてくれるものになつた。

おふくろ考

平成十四年十一月二十七日(水)

広辞苑を引くと、おふくろは御袋と出ている。母親を親しんで呼ぶ語、古くは尊敬語とある。でも、多くの場合漢字を使わずひらがなで書く「おふくろ」の語感、それほどに簡単ですつきりしたものはない。この言葉に人それぞれ

「人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。やはり向こう三軒両隣りにちろちろする唯の人である」と。おふくろは自分を育ててくれた人であるけれど、何か特別の人であつたわけではない。私の身の回りでは、母親を呼ぶとき、おふくろをよく口に出す人は、男親を早くなくした男性が多いように思う。母親が苦勞する姿を見てきたためだろうか。おふくろに似た言葉に「おやじさん」という言葉がある。これは、多くの場合、仕事上の厳しい育ての親で、父親がわりをしてくれた人に使われる。だからおふくろの無償の愛とはちがう。しかしおふくろという呼称はすぐれて教育的な意味を持っている。「おふくろの味」と呼ばれる料理があるが、すでになつかしいものになつてしまつた感がする。今子供達がこの味を知らずに育つことがあつていいのだろうか。母親は子に何を教えるべきなのか。

歌手の森進一が熱唱する「おふくろさん」の中にある個所がそれである。あるときは空であり、あるときは花であり、あるときは山である。雨が降れば傘になり、強く生きよと教えてくれる人である。また世の中に愛をとらせと真実を教えてくれる忘れることのできない存在でもある。夏目漱石の「草枕」という小説のはじめのところにこんな言葉がある。

先日、ナワテで発行している「かえる通信」にこんな文が載つた。「タゴはんの残りもので時々弁当をつくつてくれる。最近ちよつと気になることがある。おにぎりはふたつなのだが大きさが違つたりするのである。ふたつ握る間にオフク口の握力が明らかに変化しているとしか思えない。オフク口もトシかなあと思つのである」投

稿者Kさんは八十過ぎである。

わが家のポチ

平成十五年二月二十七日(木)

黒い犬にはクロという愛称をつけると同様、小さい犬はポチと名付ける。人間様の子どもを呼ぶときの愛称チビと同じである。ところがなぜかうちの犬はポチなのにキングという名である。

人がかわいがって心のなぐさめに飼う動物をペットと言うが、かわいがり方は千差万別である。私は長い間塾をやっている子どもと接してきた。その際もつともてこずった子どもは、家庭で甘やかされて猫かわいがりされた子だった。

それで私は猫はあまり好きではない。それは仕事とむすびつけた自分の勝手です。そう思っているだけだ。違った生活感情を抱いている人は、猫ちゃんがゴロニヤーと甘えて膝にすりよってくる癒し系が限りなく好きだと言っただろう。でもお私はやはりワンちゃんだ。それも尾っぽをちぎれんばかりに振るやつだ。吠えられるのは苦手。やたらと吠える犬が遺伝子のDNAのためなのか、飼い主のしつけによるものかは知らない。ただ動物に詳しいムツゴロウさんによれば、咬みつ

く犬は明らかに飼い主に問題があるそう。

わが家のキングは宮沢賢治の詩にあるように、もう随分年なのだが、雨ニモマケズ、風ニモマケズ、雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ、丈夫ナカラダヲモチ、イツモ静カニ笑ツテ、健気で柔順な眼差しを送ってくれる雑種犬である。一日に二度カップ一杯のフードと水で満足し、朝夕の散歩をたのしみにしている。

散歩の途中でウンコをするとき、遙か鉢伏山の頂を見つめながら無念夢想に構えている姿たるやまことに哲学者然としている。ひもを緩めてやって気ままだに犬といっしょに思考する私は、おかしさと共にいとおしさを感じる。終わると後足で砂をかけるのだが、それは形だけ。私が跡片付けをする。そして何事もなかったように散歩する。

毎日ただそれだけの散歩なのだが、もしそれが無い日があったら、とふと思うことがある。ペットは「飼う」ということ以上のものを無言で私たちに教えてくれている。

成人式

平成十六年一月三十日(金)

今年の成人式は一月十二日に行

なわれた。かつて成人式は一月十五日と決まっていた。それが変わったのは、国民の祝日が連休をつくるために日曜日の翌日に設けられるようになったからだ。

成人式を迎えた若者たちを心から祝うという精神が失われて便宜的になって、形式化した。荒れた成人式がテレビの画面に映し出される。毎年成人式の日夜のニュースになる。心が痛む光景だ。

子供が一人前の大人になったよるこび、それは家族のよろこびである。その祝い方はそれぞれの家で、それぞれの祝い方でやるのが一番だ。親が子のため、そして子が親に感謝の気持ちで迎える日として、つつましくも厳かに、しみじみと魂の伝わる宴の日とすべきものだと思う。家族の絆を強く確かめ合う日だと思う。

その日は、家を離れて遠くに働きに出ている者も、親のすねをかじって勉学に勤しむ者も、ふるさとに帰って、家族と共に大人になれたよろこびをわかち合うのがいい。

かあさんが夜なべをして
手袋編んでくれた

“木枯らし吹いちゃつめたから
うて せつせと編んだだよ”

ふるさとの便りはとどく
いろいろの匂いがした

(窪田聡作詞作曲「かあさんの歌」)
日本がまだとても貧しかった頃の歌だ。親は子どもの成長をたのしみにいっしょけんめい頑張った。子どもも父親の背中を見て育ち、母親の慈愛に満ちた苦労の中で育った。

父さん、母さん、歳だけは二十になつた。まだまだ未熟なところはいつぱいあるけど、厄介をかけるだけでなく、少しは父さん母さんの手助けができるようになった。もう少しの間、心配かけるかもつれないが、いっしょけんめいがんばる。今日までありがとう。今は昔と違う。そんな時代ではないと言う人もいるだろう。私こそそう思わない。一人ひとりの心底には、みな親への感謝の気持ちがあると知っている。

それを行政などが十把一絡げにして大ざっぱに冷たく形式的な成人式をやってみせるからおかしなことになる。そのきわめつけは、成人を一票に数える愚かな政治家がいるからだ。

本来、成人式はイベントとしてやるべきものではない。むしろ家族にとつてとても大事なしきたりであるはずのものだ。

了